INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

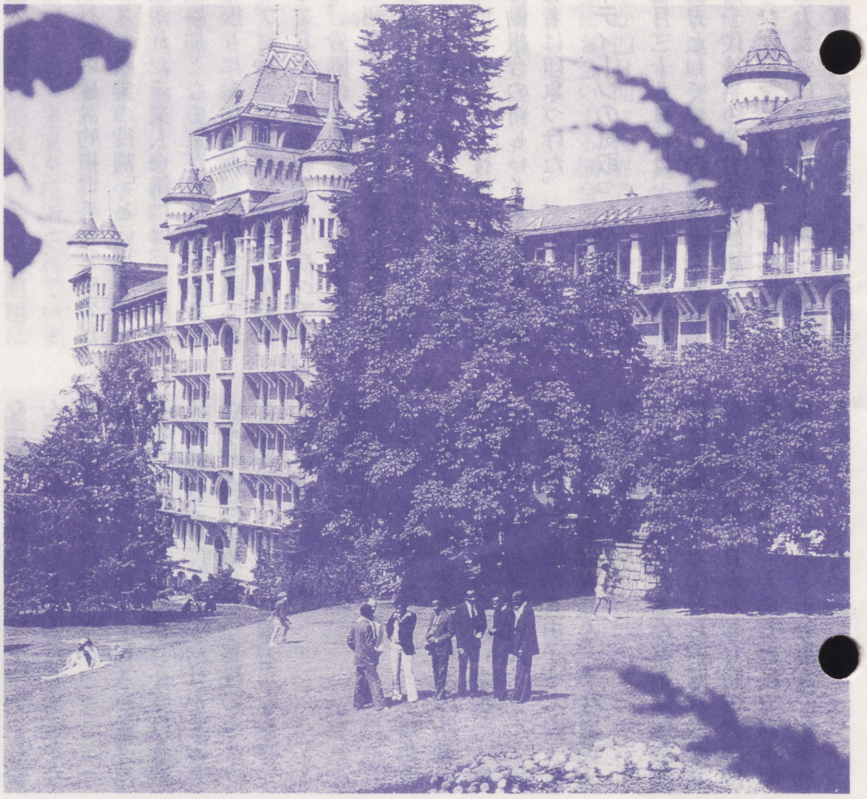
IMAJ ニュース

No.79

（社）国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　1995年12月25日
発　行　所　㈳国際ＭＲＡ日本協会
〒113 東京都文京区千駄木5－49－2
ベガハウスミタケビル102
TEL.03-3821-3737
FAX.03-3821-6479
発　行　人　住友　義輝
編　集　人　加藤　保之
頒　　価　1部200円

第49回MRAスイス・コー世界大会特集号



日本からは五十六名が参加

第四十九回ＭＲＡコー世界大会は、七月八日から八月二十四日までスイス・コーのＭＲＡ世界会議場マウンテンハウスで開催され、日本からは遠藤實ジュネーブ駐在大使ご夫妻をはじめ五十六名が参加した。

開会式と共に始まったヨーロッパ会議は、「多様性を生かした協調―ヨーロッパ大陸の癒し」をテーマに七月八日から十六日まで開催された。ヨーロッパ各国からの参加者の中には、ポルトガル、アルバニア、ロシア、ルーマニア、旧ユーゴスラビア、ポーランドからの参加者も多数含まれ、通訳の言葉も従来の英語、フランス語、ドイツ語に加えロシア語、クロアチア語、ポルトガル語と多彩であった。

□主な内容□

◆第49回コー世界大会レポート　……1P
「紛争解決に取り組む地球市民」
大阪青年会議所理事　東　和彦
「壁・廊下・家具にも染み込んだコーの精神」
東芝 エネルギー総務室長　井樋隆行
「労働組合主導の社会貢献活動」
東芝労働組合副委員長　佐谷隆一

◆第10回コー円卓会議レポート　……9P
「人間本位制のシナリオ」
日本経済新聞取締役論説主幹　市岡揚一郎
「国際的企業に課せられた倫理的責任」
富士銀行相談役　端田泰三
「企業の行動指針」―日本における反響
東海大学教授　高瀬　保

◆第6回アジア太平洋青年会議レポート　……16P

◆MRA講演会シリーズ　……21P
「新しいパラダイムを目指すMRA」
アジアセンター ODAWARA 代表　渋沢雅英

コー・スカラーズプログラム

ヨーロッパ会議と同時期に「コー・スカラーズプログラム」が始まった。五週間のプログラムで、七ヶ国から十三名が受講した。コー・スカラーズプログラムは、新しい国際情勢に適した紛争解決の秘訣を、直接解決に携わった人々の経験から学ぶことを目的としている。大学生、大学院生を主な受講者として、紛争の具体的ケーススタディーを豊富に取り入れたアカデミックなプログラムである。今年の受講者の中には、政治家を目指す学生、新聞社を経営するマレーシアの青年実業家などが含まれ、世界大会の運営にも参加しながら受講していた。

明日の社会を目指して

「明日の社会を目指して」と題した青年主催による会議は、イギリスの法学部の学生、芸術家、科学者、映画製作者、フランスのフリージャーナリスト、観光ガイド、建築を専攻する学生、アメリカの演出家、漫画家、それにロシアやノルウェーの学生たちが中心となって運営に当たった。歓迎のマスコットを玄関ホールに配置したり、美しいスイス・アルプスが望めるよう会議の舞台を設置するなど、斬新なアイデアも生かされた。会議の間には、静かになって会議で話されたことを考えたり、自分自身を見つめる機会が多く持たれた。

コー円卓会議に参加した日本経済新聞取締役論説主幹の市岡揚一郎氏が「若者のアイデンティティー」について講演し、欧州の若者の共感を得た。

産業人会議

「社会の建設的担い手としてのビジネスと産業の役割」というテーマで開かれた産業人会議には、十六回目の参加となる東芝労使代表六名が三年振りに参加した。全体会議、グループ討論、ボランティアの作業を通して日本の良き紹介者となってくれた。労働組合副委員長・佐谷隆一氏が紹介した新しい日本の組合活動の姿は、イギリス、フランス、スイス、オーストラリア等の新聞でも取り上げられた。一行は、日本の企業や労働組合の新しいイメージを各国参加者に印象づけた。

ハイティーンの気取った夕食会

七月二十八日には、七月の初めから裏方としてコーの運営を支えてくれた十代後半の若者達に感謝を込めて、フォーマルな夕食会が開催された。大食堂に大きなテーブルを用意し、真っ白なテーブルクロスに綺麗なバラのテーブルフラワー、そしてMRAの創始者フランク・ブックマン博士が賓客用に使ったという食器類や、マウンテンハウスが豪華なホテルだった時代に使用されていた銀製品とクリスタル等、五つ星ホテルにも引けを取らないセットがなされた。招待を受けたハイティーンのゲストたちは、女性はドレス、男性はスーツで現れ素敵な紳士・淑女となった。本物のテーブルマナーを学んで欲しいという大人たちの密かな願いは叶えられた。

一週間後、このサービスを受けた若者たちが中心となり、今度は会議の参加者全員に正装で給仕をするというお返しがあった。普段のセルフサービスとは違った華やかな夕食となった。

都市問題会議

八月一日から七日まで、一九九〇年に関西日本・スイス協会の派遣中学生としてコーの会議に参加し、現在は大学で学ぶ寺村由美子さん、篠原多佳さん、塚本真由子さんの三名と友人の桑原由貴さん、小林由美子さんが参加した。

八月四日に始まった都市問題会議には世界数十カ国から約四百六十名が参加した。日本からも高校教師の森川亨さんと、大学で福祉や都市開発を勉強している市谷薫さんが参加した。

紛争地域会議

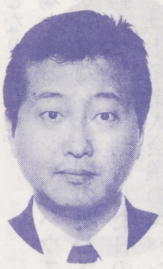
紛争地域会議は、紛争の真っ直中にある当事者や、紛争解決に携わった人たちの経験から学び合うために一九九一年から毎年開かれている。本年は八月十五日から二十五日にかけて開催された。日本からは昨年に引き続き総合研究開発機構（NIRA）研究企画部主査の平井照水さん、東京大学法学部助教授の城山英明さん、ドイツ・エッセン大学の戸沢英典さんらが参加した。城山助教授は「紛争解決におけるNGOの役割に関する基礎的調査」と題した、カーターセンターやMRA等の活動に関する比較研究をNIRAからの委託でまとめた。また、戦後日本の国際社会復帰に尽力した相馬雪香さん、国連NGOに認定され紛争解決の支援活動を始めた大阪青年会議所の東和彦さんと北島茂治さん、神戸の小学校教師の奥野美智子さん、それに前キヤノン特別渉外室長の蓼沼正光さんご夫妻も滞在先のフランスから参加した。

長期で参加した小学生、中学生、高校生の五名も言葉の壁を乗り越えて、共にボランティアの仕事に励みながらたくさんの友人をつくった。若い民間大使たちの今後の活躍に大いに期待したい。

事務局　藤田玲子

紛争解決に取り組む地球市民

大阪青年会議所理事
東　和彦



『シンク・グローバリー、アクト・ローカリー』

私は大阪青年会議所の理事として本年「新しい地球市民のための地球上の諸問題の研究と推進」を担当する委員会を受け持っております。この委員会では、冷戦以降の民族・宗教・文化の違いから起こっている対立について歴史的背景や構造的原因を研究し、青年らしいチャレンジ精神でその様な諸問題の解決策を探るのが目的です。

大阪青年会議所は、発足以来『シンク・グローバリー、アクト・ローカリー』を常に、社会開発運動を展開してきました。近年は交流を中心とした事業から、地球全体を長屋と考えた地球市民運動を推進し、世界中の人々の問題を隣人のことのように親身になって考え、協力しあう活動をすすめております。

私は、八月十四日より、十七日まで紛争地域会議に同青年会議所の北島君とともに参加させていただき、わずか四日間に世界各国の数多くの方々にお会いする機会を設けていただきました。

北南米ではジャマイカ・グアテマラ・ブラジル・アメリカ・カナダ、アフリカではソマリア・南アフリカ共和国・ルワンダ・タンザニア・ブルンジ、中東ではキプロス・トルコ、ヨーロッパではドイツ・スイス・イギリス・フランス・イタリア・オランダ、アジアではフィリピン・カンボジア・中国・台湾他多くの方々の講演や話をお聞きしました。集まられた方々の中には現在紛争の真っ直中にある地域や、紛争から脱しつつある地域の方々が多数いらっしゃり、真剣に平和の達成を模索されていました。また直接自らの国が諸問題に関係していないにも関わらず、一所懸命にお世話をされている他の国の方々の姿を拝見して心から感動しました。

具体的には、南アフリカ共和国が紛争から脱するに至ったプロセスを、黒人と白人との仲介役を果たしたエスターハイゼ教授よりお伺いしたり、キプロスの政治家スタティス・キス夫妻にはキプロスがトルコ系とギリシャ系との間で内戦にいたった歴史的背景をお聞きしました。また、カナダ・インディアンのジョセフ・ノートン氏からインディアン自治区の問題をお聞きするなど、日本にいては全く知ることが出来ない、また理解できない数多くの表に出ていない諸問題や、その解決策を学ぶことが出来ました。

『地球は長屋』として痛みを感じる

そして、それらの課題をコーという場所で寝食を共にすることにより、古くからの友人のように語り合えたことは、まさに私たちが求めている『地球は長屋』、すなわち『本当に隣人のこととして痛みを感じること』そのものでした。

今回の会議を通じて、私たちは今、この人たちの痛みを少しでも理解する努力の大切さと、その痛みを少しでも解決していく何かを考えていかなければいけないということを感ずると共に、このような紛争の解決は決して国家間、国連のレベルだけではなく、ひとりの人間として、また地球市民として、能動的に運動をすれば何かが出来ることも学ばせていただきました。

これからも、大阪青年会議所として、またMRAのひとりとして、ぜひ諸問題の解決を大阪の市民の方々と共に考え、地球レベルで行動していきたいと思います。（終）

●アパルトヘイト解決に尽力した南アのコーネリアス・マラバティ教授（左）と会談するカンボジアのテプ・ボン大僧上（中央）、レニー・パンカンボジア子供教育基金代表（右）

●クロアチアからの参加者

壁・廊下・家具にも染み込んだコーの精神

東芝 エネルギー総務室長
井樋 隆行

西欧産業と日本産業の仲立ち役

コー産業人会議については、これまでに参加された方々より、折に触れ話は聞いておりましたが、MRA運動をベースとした会議であり、何か堅苦しい会議を想像しておりましたが、思い出に残る素晴らしい会議出席となりました。

会場となるマウンテンハウスのテラスから見たレマン湖の美しさにまず感動しました。到着した日の夕食後に、コー産業人会議のエバンス事務局長他七名の方々とのミーティングの場を設営頂きましたが、メンバーの方々より「東芝は民間大使の役割りを果たしてきた」「欧米の産業と日本の産業の関係を良くするための役割を果たしている」等の発言があり、これまでの東芝労使が果たしてきたMRA運動での活動が高く評価されていることを、身を以て感じることが出来ました。

今回の産業人会議は「社会の建設的変革の担い手としてのビジネスと産業の役割」というテーマで開催されました。全体会議の冒頭に出席者紹介を兼ねた発言の場を与えられましたので、今回のテーマに関連し、東芝労使が当面の課題として抱えている「事業の選択と集中」に従う従業員の雇用の確保について述べさせていただきました。即ち「円高問題」「貿易摩擦問題」、それらに関連した「海外生産拡大とそれに従う国内空洞化問題」「事業構造変革に伴う従業員の配置転換や職種変更問題」、加えて「日本労働市場全体における高齢化・高学歴化・ホワイトカラー化」といった急速な変化に対して「雇用の確保」を大前提に、変化に対応しうる新しい労使関係の構築を模索していること等について話させていただきました。参加者の方より「日本には失業問題など無いと思っていたので考えが変わりました」との意見を聞き、日本の現状の一端でも伝えることが出来たのではと思っております。

フォーラム（分科会）では「これからの雇用問題—個人の潜在的な能力の開発」というテーマで討議いたしました。イギリス、フランス、ドイツ、台湾など十カ国の方が参加されていましたが、人間の尊厳の問題・起業家支援・雇用の創出など話題が多く、短時間での意見交換では十分な理解は出来ませんでしたが、雇用問題については、国それぞれが文化・宗教・国民性などの要素により現在があり、又将来を構築しようとしている姿を感じることが出来ました。

ロシアやクロアチア人との交流

会議中、ロシアとクロアチアから参加されていた方々との交流の機会がありました。ロシアの大学教授が、ロシアの現状は社会体制の変化の中で混乱はあるものの、将来を見据えた着実な社会体制構築の活動が活性化している様子を自信を持って述べられる姿を見て感動いたしました。またクロアチアの大学教授と学生さんとの交流の場で、「現在のセルビアとの紛争は民族紛争ではなくイデオロギー紛争である」「今国連が何もしてくれないのならば我々が立ち上がるしかない」等と語っていた学生さんの真剣な眼差しは、今も忘れることが出来ません。

コーでは、いろんな国の各界各層との交流がありましたが、マウンテンハウスに到着した瞬間から、そこに集う人たち全員がごく自然に微笑み・挨拶を交わし、仲間として受け入れてくれる雰囲気はこれまで経験したことのないものでした。会議に出席しても、出席者全員が、何日も前から参加している仲間のように受け入れてもらったため、「何か発言したい」「何か伝えたい」という気持ちが、何の抵抗もなく自然に起こってきました。

マウンテンハウスの長い歴史の中で、壁・廊下・家具などに染み込んだMRAの精神がその雰囲気を作り出しているとしか思えない不思議な体験でした。これまでの人生経験の中で知らなかった世界をまたひとつ経験することが出来ました。今後は、コーでの素晴らしい経験を自分の人生の中にぜひ生かして行きたいと思っております。（終）

●壇上でスピーチをする井樋氏と東芝労使代表団

労働組合主導の社会貢献活動

東芝労働組合副委員長
佐谷隆一

組合員と家族に共感される組合を目指して

産業人会議への東芝労使による参加は三年ぶり十六回目のことでした。今回の東芝労使六名はいわば日本代表の立場での参加となりました。

今年の産業人会議は『社会の建設的変革の担い手としてのビジネスと産業の役割』のテーマで全体会議、分科会を通し各国の人々と意見交換を行いました。さらに朝・昼・夕食時にも時間をかけて各国、各界の参加者がそれぞれのテーブルに分かれて懇談をし相互理解を深める場もありました。

マウンテンハウスでは全員が一日一回はボランティアで会議運営に参加する役割がありました。ある人は食事を[illegible]、またある人は皿洗い・給仕など当番で行いましたが、その場でも言葉は通じませんが心の交流が行われ、私たちのTOSHIBAマークの『祭りはんてん』が大の人気を博しました。

四つのイニシアチブを紹介

三日目、朝食をとっていると、せっかく三年ぶりに東芝労使に参加して頂いたのだから、朝の全体会議でぜひお話を『佐谷さん』にとお願いされました。そのスピーチの内容を思い出してみました。

「私は十三年前の一九八二年にコーの会議に参加させていただき今回で二回目となります。私の体験の中から四つのお話をさせて頂きます。まず初めに私が労働組合役員として、その立場で悩み、MRAに参加して気がつき、そして行動していることをご紹介します。労働組合は組合員の雇用を守り、賃金など労働条件を向上させることが目的と一般に社会からみられています。しかし今、世界が大きく変わり、情報化社会の中で人々の考え方が多様化しています。日本では組合の組織率が低下し、組合員の組合組織に対する求心力も弱くなっています。そして組合運動に変化が求められています。私も組合役員としていったい何をすれば組合員が共感してくれるのか悩みました。

一九八二年にここコーのMRAに参加し、世界の多くの人々の話を聞き、学びました。『これからは心の時代だ』『もっと精神面に焦点を当てた活動に考え方を変えなければ』自分でも気付き始めました。『組合員とその家族が組合の活動に注目し、共感してくれる運動を始めよう!』と次のことを始めました。

一、工場花いっぱい運動

私はコーへ来た時の思い出に道端や家々の窓に美しい花があふれている、この情景を思いだし、工場や周辺を『花いっぱい』にしようーそうすれば美しい花に誰もが喜び心が爽やかになるだろうと考えました。

会社が構内に樹木を植えるのではなくて、組合員の募金によって花を植え、昼休みに水をやり育て、工場の門の周りを花いっぱいにしました。今も咲いています。社員が毎日この花に迎えられ出社して来ます。

二、親子夜行軍

今、親子の断絶から不幸なことが時折おきています。お父さんは仕事で忙しくて子供と対話をする時間がありません。そこで地域の人たちと

●全体会議でスピーチをする佐谷氏

●石滋宜 中国生産力センター理事長（手前左端）と記念撮影

『親子夜行登山』を企画し、私も夜道の警備役など組合員と一緒にボランティア参加をしました。親と子供が一緒に手をつなぎ真夜中の山登り、そして山頂で仲間と歌をうたいます。空が明るくなるころ、父と子供はお互いに励まし合い山の麓へ。そこにはお母さんがトン汁を作って待っています。参加した父親は「私は今日は幸せだった。今までこんなに長い時間、子供と会話したことはなかった。子供もきっと私を理解してくれただろう」と目にうれし涙。その背をじっと見つめる子供の視線に父親の頼もしさが映っています。

三、千名の市民音楽会

次は地域の人や多くの組合の仲間に呼びかけて実行している『千名の音楽会』です。三歳の子供から七十歳のお年寄りまで、そして身体障害の子供たちも学生や組合員も集まって千名がスペインの作曲家ラベルの『ボレロ』を演奏するのです。クライマックスは千名の手が歌がひとつになります。終わった瞬間、「ヤッターッ」と達成感と感動を味わう子供たち。小学校の先生は「私は四十名の生徒をひと時も静かに出来ない。千名の心がひとつになるなんて！」と感激する場面もあります。

世の中が満たされている時、感動の場面が少ないこの世の中。今年も私は実行委員長として、この活動を続けます。

四、カンボジアの学校作り

MRAの活動の中でも紹介されていますカンボジアへの支援の一環として私たちの組合も『カンボジアの子供に学校をつくる会』の活動に参加することにしました。

『今日のパンよりも明日からのパンの作り方を』のことわざがあります様に、カンボジアが自立するために人々には希望が、子供たちには教育の場が必要であります。私たちは、全国東芝の組合員に呼びかけてカンパ（募金）活動を始めました。明春には、若い組合員をプノンペンに派遣して一緒にペンキ塗りなどをして学校作りを体験します。カンボジアの子供たちのあの素直な笑顔に会えることが楽しみです。

私たち大人は今日の自分たちのことだけでなく―『この地球、子供たちから借りているのだから』―こんな思いで、ご一緒に今を生きるテーマにしてみませんか。

こんなお話をさせていただきました。終わった瞬間皆さんからエールをいただき、ただ感激するばかりでした。

私の三回目のコー訪問はきっと、現役OBとなった頃に夫婦で訪れたいと心待っています。（終）

MRAビデオのご案内

日本語吹替版

明日を愛するがゆえに

―イレーヌ・ロー夫人の生涯―

頒価 5,000円
（郵送料サービス）

好評頒布中！

●イレーヌ・ロー

1898年生まれ。第二次大戦中、反ナチ抵抗運動の医療班を組織して闘った。三男をゲシュタポに拷問され、フランス人そして母親としてドイツとドイツ人を心から憎んだ。戦後間もなくスイスのMRA世界大会に参加したが、ドイツ人がいるのを見て直ちに帰ろうとした。しかし、ブックマン博士に「ドイツ人を除外してどうしてヨーロッパの融合と再建が出来るのか」と説得され、三日三晩寝ずに悩んだ末、ドイツ人を許し憎しみを謝罪した。これが、独仏間の関係改善の道を開き、後のEC設立のきっかけとなった。マルセーユ選出の国会議員や仏社会党中央執行委員等も務め、世界各国を訪れ融和を説いた。1987年、88歳で没する。

ドイツを仲間外れにして
ヨーロッパの再建ができますか？

独仏の歴史的和解は勇気ある人々により始められ、後のEC設立の礎となった。

お申し込みは
MRA事務局へ 03(3821)3737

自分の住む社会へのサービス

ロンドン大学（LSE）学生
田中由紀

ロンドンで勉強する自分は、「この夏スイスの国際会議場でボランティアとして働きませんか」という募集を見ました。そうして、コーに五週間ほど滞在することになりました。私たちの役割は、九人のグループで食事のサービスチームのリーダーを務めることでした。今、こうして振り返ってみると仕事に限らず、会議や食事の時間の話し合いや新しくできた親友との討論をとおして、また催し物に参加して学んだこと、考えさせられたこと等たくさんあります。そのひとつに「サービス」というものについて、新しい見方を発見したことがありました。

サービスチームの仕事は、実質的にも精神的にも、マウンテンハウスでの日々の重要な部分でした。人手の足りない時は、前もってリクルートしないと、食事が遅れたり、食堂の列が混乱したりします。でも、もっと大切なのは精神面だと感じました。チームには本当に様々な人がいます。十五・六歳のはつらつとした子から、じーっと人を睨むように座って何[illegible]話さない若者や、仕事中でも目を見開き世の中について議論を始めるおじさん、やる気満々の老夫婦などなど。ですから、そういう人たちに仕事の説明をするにも、他のメンバーと協力させるにも、いろいろ工夫します。時間的にプレッシャーを感じたり、リーダーとしての責任を感じたりして神経がピリピリ張ることがよくありました。

人に尽くすことの楽しみ

しかし、少したってはっと気づいたことがありました。それは、この「サービス」が単なる給仕でなく、同じマウンテンハウスというコミュニティに住む人たちへの半ば義務的な奉仕であるということをあるチームメンバーに教わったことです。その日、人手が足りなくて忙しかったのに、その人は皿洗い、片付けと最後まで残ってくれたので「ありがとう」とお礼を言いました。すると彼は当たり前の如く「人々に尽くすということは楽しいことだよね。」と答えたのです。彼のすんなりとした口調は、ただ人に尽くすことの喜びだけでなく、その自然さまでを伝えていました。自分だけがサービスをしているのではなく、自分が当番でない食事のときは他の人たちが自分たちに奉仕しているのです。相互奉仕とでもいうのでしょうか。彼にとってはそれが当たり前であり、楽しくもある社会の姿なのです。コーはそれを実際に表にあらわす機会を与えてくれる小さな社会なのだと思いました。そして、自分は「サービスチームのリーダー」という立派な奉仕を目的にコーにやってきたつもりでしたが、その奉仕というものが一方的な活動でなく、いろいろなところからいろいろな方面へいつも放射されていることを感じさせられ、謙虚な気持ちになりました。

二日後、朝食の当番で、いつもより三十分早く仕事を始め、チームの皆が仕事をしやすいように、あちこち用意をしてみました。それはリーダーの「役割」外のことでしたが、その少し余分なサービスが自分の満足になり、また、かえっていつも仕事の終わりに感じる疲れが少なくなったような気がしました。

「助ける人」と「助けられる人」の支えあい

都市問題会議で、ハンディキャップの人たちを相手に働くある男の人が言いました。「今はもう、ハンディキャップの人たちが、そうでない人たちをお茶に呼ぶ時代なのです。」私は又、はっとしました。ハンディキャップやお年寄りの人たち、孤児、難民、ホームレス、滅ぼされていく自然環境や動物たちなどは弱いものたち、絶えず「助けられる」存在だと感じていました。だから助けられるものが助けるものをお茶に呼んだら彼らの役割が逆さまになってしまうではないか。

でも、それはただの偏見で、便利な分類でした。世の中には「助ける人」がいて「助けられる人」がいる。そして、自分は「助ける人」だろうと勝手に思っていました。人の世話になる人たちは完全無力なわけではない。例えば、足の不自由な人が温かなお茶会を開くことは十分可能なことです。不自由するところは助けてもらい、与えることのできるところで人に喜びを差し上げる。

よく考えてみれば、これは誰にもあてはまることだと気づきました。そして、また謙虚な気持ちになりました。同じ都市問題会議で他の誰かが言いました。「私は、自分がやりたいこと全部ができないからといって、自分のできる何かさえを放棄するということはしたくない。」自分を含める誰もが、ハンディキャップがあり、サービスを与えられるのだという全体的な見方を覚えました。

外国人というハンディキャップをもつ私も何か、ロンドンの身の回りで「サービス」ができないだろうか。同じ建物に住む三人のイギリス人たちをお茶に呼ぼうかという気になりました。同じ屋根の下に住むもの同士、同じ大家さんをもつもの同士、何か共通するものがあるはず。それを分かち合う場を提供しよう。

日本茶でも出してみようか。

マウンテンハウスでは、最初は見知らぬ者同士なのに、どんな人でも話しかけようと思えばできるのです。様々な人たちがサービスチームでエプロンをして一所懸命働くのを見たからです。ロンドンに戻り、偉そうに歩く男の人や、お化粧をしてつんと澄ましてる女の人をみかけると、やはり「近寄りたくない」と思ってしまいました。やれやれ現実は厳しいと思うと、目の裏側にコーでのサービスチームの人たちの働く姿がパッと浮かんでみえるのです。次の瞬間には、街を歩く怖そうな人たち皆がエプロン姿に見えてきて愉快でした。彼らも、きっと社会にサービスしているんだなと。コーのちょっとした魔法がロンドンにいる自分の観点に影響しているのが楽しくもあり、大切だとも感じました。（終）

自分自身との対話

厚木東高校教師　森川　亨

緊張を和らげる隣人紹介

本年の八月四日から八月十二日までコーのマウンテンハウスに滞在し、MRAの「都市問題会議」に参加しました。

会議といってもこの「都市問題会議」に限れば、出席者のほとんどは一般の市民や学生で、都市問題については全くの素人の私でも会議の内容は理解でき、また分科会では発言の求めにも応じることができました。十数名の分科会の参加者の国籍は英国、仏国、米国、カナダ、御当地スイスといった欧米諸国、それに日本から女子大学生の市谷薫さんと私といったものでした。

分科会はまず二人ずつのペアを作り、しばらくの間お互いに相手のことを尋ね、相手と知り合いになり、その後また全員が集まり各人が自分の相手を皆に紹介するといった隣人紹介から始まり、これで緊張を和らげた後、お互いが自国の都市の現状、問題点を発言しました。日本についていえば、首都機能一極集中問題や外国人労働者問題など、日頃は日常の諸事に追われて余り真剣に考えたことがないような話題になり大変参考になりました。

二度の観劇による理解

会議の他にも、夕べには演劇や、講演会や、ギターの演奏会等など、毎日さまざまな文化的な催し物が行われました。その中でも、「スケルトン（骸骨）」と題された演劇は随分楽しませてもらいました。この劇は英語で上演されたものですが、最初に観劇したときは大筋は分かっても、細部で、聞き取れない言い回しや、自分では正確に再現できない気の利いた英語の表現や、文化的背景の違いや、キリスト教に無知なためによく分からなかった点が多々あり、劇がおもしろかった分却って気にかかりました。そんなときに助け船を出してくれたのが、一緒に観劇していたルームメイトのMRAオーストラリア専従のデービット・ランカスターさんでした。同劇の作家も演出家も役者もMRA関係者が中心であること、また脚本はコーの書店で売っていることを教えていただき早速文字で確認することが出来ました。脚本と演劇では最後の部分が少し違っていたのですが、劇を演じた当の役者さんたちに、食事の際等でじかに聞く幸運にも恵まれました。コー出発の予定日の夕方にまたこの劇の上映があることも知り、またフランス国鉄ストライキの事情もあり、コーでの滞在を一日延ばし、もう一度この劇を、心中ひそかに晴れる思いで鑑賞しました。

また、コーでは参加者が食事、給仕等の雑務を当番制でこなしていきます。私は食事の準備の班に希望し慣れない手つきで不手際を繰り返しながら、良い経験をさせて頂きました。後は、家庭にこの習慣をどれだけ持ち込み展開させることが出来るかといったところです。更に、コーの建物内では禁酒禁煙です。私自身は近頃は、煙草とは縁が切れていますが、酒の方は和洋問わず深く長い縁が続いていましたので、コーでの一週間の滞在は大変示唆に富んだものとなりました。

一年前にはその存在さえ良く知らなかったMRAに興味を抱き、何千キロ隔てたスイスまで赴くことになりましたが、コーでの日々は、既述のように愉快で実のある体験で満ちたものでした。

しかし最大の収穫は、コーでの様々な環境のおかげで、「自分自身との対話」の方法と意欲が増大したという事です。自己との対話の量が増大すればするほど、日常生活の苦痛と混乱を助長する一面もありますが、帰国後この一ヶ月その苦痛や混乱に以前ほどは、強く反応していないのはMRAを通して知り合った多くの人々の存在によります。お互いに、本日も自分の内面の声に耳を傾け悔いの残らない一日であることを願い、文章を結びます。（終）

◇第一〇回 コー円卓会議レポート

コー円卓会議は、「競争、企業責任、収益性」コー円卓会議『企業の行動指針』の実践」をメインテーマに去る七月十九日から二十二日にかけてスイス・コーで開催された。今回はレジナルド・ブロック（アメリカ、タイム社会長）、ハイディ・フォン・ヴェルツィエン・ホイビク（ノルウェー、ノルウェー経営学院教授）、端田泰三（富士銀行相談役）、市岡揚一郎（日本経済新聞取締役論説主幹）、田林巖樹（安田総合研究所常務取締役）の各氏など参加の方々を含め、三十名の参加があった。

昨年作成し、日米欧で普及活動を行ってきた「企業の行動指針」の反響も報告され、日本側からは、アンケート調査や七月四日のワークショップに基づく反響が、東海大学高瀬保教授から報告された。（十一ページ参照）

更に、今後も日米欧の企業、経済団体などに、以下のような回答を求めていくことになった。

（一）御社には「企業行動指針」があるか、あればコピーを頂きたい。

（二）「指針」はコー円卓会議の「企業の行動指針」に合致しているか。

（三）「指針」には書かれていなくとも、御社の行動は「コー」の行動指針に合致しているか。

（四）御社は「コー」の行動指針と同様な「指針」採用を必要なしと考えるか。

また、市岡揚一郎氏（日本経済新聞取締役論説主幹）が失業問題に関して提唱した「人間本位制のシナリオ」が欧米側からも賛同を得て、これを更に敷衍した提言を日米欧でまとめることとなった。

来年の中間会議は、四月九日から十二日にかけてニューヨークとワシントンで、またコーでの本会議は、コー五十周年記念会議の一環として七月二十一日から二十四日にかけて、それぞれ開催されることとなった。

第一〇回コー円卓会議参加者リスト

一九九五年七月十九～二十二日

■ヨーロッパ

フレデリッヒ・バウアー（ドイツ）
MST社社長、シーメンス元取締役

ネビル・クーパー夫妻（イギリス）
トップマネージメント・パートナーシップ会長（元STC副社長）

ジョン・コックス（イギリス）
化学産業協会専務理事

ジョン・ル・デルス（フランス）
金融コンサルタント（元世界銀行総裁）

ラインハルド・フィッシャー夫妻（ドイツ）
ブランコ社会長

オリビエ・ジスカールデスタン（フランス）
INSEAD（ヨーロッパ経営大学院）副理事長

ピーター・フグラー夫妻（スイス）
極東投資会社（FEI）社長

フレデリック・フィリップス（オランダ）
フィリップス社元会長

ペドロ・ロケ夫妻（アンドラ）
クレディット・アンドラ社最高経営責任者

フレデリッヒ・ショック夫妻（ドイツ）
ショック社社長

グナー・ソーレンセン（ベルギー）
3M社欧州渉外部長（政府担当）

ハイディ・フォン・ヴェルツィエン・ホイビク（ノルウェー）
ノルウェー経営学院教授

■アメリカ

レジナルド・ブロック
タイム社会長

ステファン・ブラスウェル夫妻
プルーデンシャル保険副社長兼最高倫理責任者

アーサー・コリンス
メドトロック社最高業務執行責任者（COO）

ハリー・ハマリー夫妻
3M社取締役（前副社長）

ウォルター・ホードリー夫妻
フーバー研究所シニアリサーチフェロー、バンクオブアメリカ元副社長兼チーフエコノミスト

ロバート・マクレガー
ミネソタ企業責任センター所長

ジェイムズ・モンゴメリー
パンナム・ワールドサービス元会長

ロバート・ヴァールシュテット夫妻
リール精密製作会社社長

ウィン・ウォーレン夫妻、
メドトロック社会長

ケン・グッドパースター
セント・トーマス大学ビジネス倫理学教授

■日本（五十音順）

市岡揚一郎夫妻
日本経済新聞取締役論説主幹

小笠原敏晶夫妻
ニコ社長、ジャパン・タイムズ会長

賀来龍三郎
キヤノン会長

金子保久夫妻
松下電器産業理事・渉外本部副本部長

住友義輝夫妻
住友電気工業顧問、国際MRA日本協会会長

高瀬保夫妻
東海大学教授（元GATT事務局部長）

田林巖樹
安田総合研究所常務取締役

端田泰三
富士銀行相談役

《ゲスト》

遠藤實夫妻
在ジュネーブ国際機関日本政府代表部大使

《オブザーバー》

上甲晃夫妻
松下政経塾常務理事・副塾長

菅谷汎
関西大学大学院非常勤講師

コー円卓会議

人間本位制のシナリオ

市岡揚一郎日本経済新聞論説主幹が失業問題に関して提唱した「人間本位制のシナリオ」の概要は以下の通りである。

日本における失業問題と雇用

(一)日本は失業率が低いと言われるが、実際はそうではない。

・一九九五年四月の失業率は三・二パーセントと過去最高を記録。構造的にも高度成長期は一パーセント、石油ショック時は二パーセント、バブル崩壊後は三パーセントと徐々に水準が上がってきている。

・景気が悪化すると、①時間外労働の削減　②ボーナスの削減　③失業の順に影響する。

・現在、時間外労働は$\frac{1}{3}$まで減っており、約二百万人の企業内失業者(職場はあるが仕事のない者)を含めると実質的な失業率は八パーセントを超えている。

(二)こうした状況の背景には、循環的要因と構造的要因がある。

①循環的要因

・経済成長率一パーセント(日本は三パーセントを割ると企業の発展が止まる)。

②構造的要因

・円高のため、日本企業が海外に生産拠点を移している。

・アウトソーシング(管理部門等の外注化)が進み、中小企業の失業率が上昇している(例〝株式会社経理部〟)。

・電子メディアの発達によりネットワーク化が進み、ホワイトカラーが削減可能になっている。

以上のことから、景気が回復しても失業者が減少するとは考えにくい。

(三)そこで、以下の対策が考えられる。

①生産性を上げる。

②水準を引き下げる。

賃下げ。カーブはそのままにして(時間外のカットはそのひとつ。ベアゼロというところもある)。

③賃金カーブを寝かせてしまう。

これは団塊の世代にとってはショック。四十五歳早期退職制。また、有力な方法と見なされ始めているのが年俸制。結局③を大なり、小なり採用せざるを得ない。

その場合、以下の問題点が現れる。終身雇用、年功序列賃金は社会のトータルシステムに支えられたきわめて精緻な制度だった。社内預金制度、住宅融資、福利厚生、社員教育、企業内労働組合などである。これらが崩れて社会の安定が維持できるか。そこで、以下のようなシナリオが考えられる。

今後のシナリオ

〈シナリオA〉

停滞型—保護主義・規制の温存

・購買力平価　180～200円⬇180円で人を雇い、

・卸売り物価　140～160円⬇140円で資材を仕入れ、

・外為レート　80～90円⬇80円で製品を売る。

これでは日本企業は国内から出ていくことになる。

〈シナリオB〉

弱肉強食型—すべて自由競争へ⬇貧富の差の格差拡大

●講演する市岡揚一郎日本経済新聞取締役論説主幹

①コンピューターを使う人

②コンピューターに使われる人

③①になりたいがなれない人

④コンピューターが嫌いな人

二十一世紀には③が増えることによって、外国人排斥が始まる。

〈シナリオC〉

人間本位制のシナリオ—規制緩和

・携帯電話や米の価格に見られる規制緩和の進展

・何もかも日本で作ることを止める⬇構造改革

・研究開発を進める⬇独創的な人材

・企業が従業員の世話をやめる⬇社会がシステムを支える

・教育投資を進める

・若年層は仕事熱心である(「就社」ではなく「就職」の傾向)

・保護主義の大きな壁(制度・法律・慣行・手続)をなくし、世界に標準化して行くことである。

「コー円卓会議・企業の行動指針」についての日本における反響

東海大学教授　高瀬　保

コー円卓会議・日本委員会は、一九九五年前半にアンケートを作成して配布し、「企業の行動指針」に関する反響を調査した。約五十五の回答が寄せられた。また、一九九五年七月四日に東京で「企業の行動指針」に関するワークショップを開催し、約七十名が参加した。会場で第二回目のアンケートを配布し、約五十の回答を集めた。二回のアンケートに対する百五の回答（重複はほとんどない）のうち約四分の三が、企業人および経済団体からで、残りの約四分の一が教育関係者からのものであった。以下はアンケートに対する回答とワークショップにおける討議に基づく、日本の反響の概略である。

A、行動指針の有用性について

1、日米欧合作のプロセス及び日米欧が価値と原則を共有できることを示したことが有意義。企業の多国籍化が進む中で異文化間で相互理解に基づいた信頼関係を築くことを助ける。世界の企業相互のコミュニケーションが円滑化し、企業が世界の進歩に貢献しやすくなる。人類の生存、繁栄、幸福のためのインフラを形成する。世界の社会環境の保全に不可欠である。

2、社会の公器としての企業が目指すべき姿を示す。重大な決定が必要な時の判断基準となる。企業は企業市民としての役割を共生と人間の尊厳の二つの理念に基づいて果たすべきである。共生と競争という相反する概念を調和させる。自由、平等で公正な競争の確保、すなわち過当競争と過小競争からの脱皮を助ける。企業の自立、すなわち政・官・財の癒着からの脱皮を助ける。

3、企業の健全経営は、従業員の道徳観に依存する。企業倫理の重視が企業の存続に不可欠で、企業発展の原点となる。長期的に見れば、企業イメージの向上などを通じて収益性や競争力に貢献する。

4、各国共通の行動指針であれば、日本企業が自信を持ってグローバルに適用できる。日本が国際協調のために国際ルールを遵守して規制緩和を推進し、道徳的国家になることを助ける。各国の相互理解を進め、日本および日本企業についての誤解を解く助けになろう。

5、アジアをはじめとする第三世界に進出する企業に有用である。たとえ、第三世界で圧力や規制がなくとも、先進国企業が自主的にこの指針を実行し、地元住民に喜ばれるのを推進する。

6、この行動指針は、企業のみならず、非営利団体である大学、宗教団体、NGOなどのあらゆる組織に適用できる。ただし、ステークホルダーの範囲が異なる。

B、実際の適用上および普及上の問題について

1、各企業はその実状に合わせて社員がイメージしやすい行動規範を作る必要がある。各企業独自の行動規範にこの行動指針を取り込むことが出来る。

2、この行動指針の趣旨に賛同する企業その他の団体のリストを作成することに賛成する。ただし、形式を単純化し、対象を拡大すべきである。

3、この行動指針の実施を推進するために実践的組織をつくることに賛成する。例えば、関心ある団体（経済団体、学会等）が毎年交代で幹事となり、会合を主催してはどうか。

4、企業内で行動指針の理解や研究がある程度進んでから、この行動指針を経済や社会に反映させる最善の方法を検討し、実行を進めたい。当分の間は理論の精密化よりも産業界の底辺で幅広く経営倫理に対する重要性、関心の増進を図ることが第一である。最小限必要不可欠な骨太のものを押さえることが肝要と考える。

5、短期的に役に立たなくとも、長期的観点から実践したいという哲学と実践のための熱意が関係者に必要である。

6、役員は、企業が社会に対して負う責務の管理者として、種々のステークホルダーの要望や期待に答えてこれらを衡平に遇する役割を果たしうる。

7、行動指針の有効な実施のためには、トップまたは役員の確固たる意志とリーダーシップ、幹部社員への趣旨の徹底、およびそれに従う社員全員の多大な努力と忍耐が必要である。この行動指針を日々の社員の行動規範として使いたい。行動指針を忘れないように、繰り返しそれに注意を喚起するシステムが必要。社員手帳に要約を入れる、企業内雑誌で広報する、社員集会で言及するなどの方法がある。

8、行動指針の実施は、長期的には、オーナーや株主の利益になる。

9、文化的背景または経済の発展段階を異にする国の間では、ステークホルダーの事情が違い、行動指針を実施する難易度が異なろう。これを考慮する必要があるが、できる限り困難を克服して共通の行動指針の実施に努力することに、この行動指針の意義がある。例えば、回教文化圏でどこまでこの行動指針を適用できるであろうか。日本では、従業員と仕入先の項目の実施は比較的容易だが、オーナー・投資家の項目の実施は容易ではない。国別の相違について情報交換をし、各国における実行上の障害を取り上げてその解決方法を研究し、提言していくことが実行を助けるであろう。

10、この行動指針はさまざまの文化を背景として抽象的に規定しているので、実際にどう適用するか分かり難い部分がある。規定を具体的に適用するための例示が必要。例えば、入札における談合禁止。

11、アジアなどの開発途上国および旧社会主義国への普及が望ましい。しかし、それは困難を伴うであろう。旧社会主義国では私企業が未発達で、国家企業も企業としての自己責任の観念が乏しい。参考資料として情報を与えることから始めるべきであろう。まず、日米欧で実績を積み、その経験を生かして他地域への普及を考慮すべきである。

12、まず、貿易関係企業や多国籍企業がこの行動指針を直ちに実行すべきである。内外を問わず実行すべきものである。国内中心企業も実行できる。ただし、時間の余裕が必要な国内企業がある。この行動指針はきれいごとに過ぎて現実とかなりかけはなれている。特に、中小企業にとって高い次元の究極の目標で、理想と現実の狭間で折衷して行動したい。この行動指針は先進国と大企業を頭において作られている。途上国と中小企業の価値観を入れて、改善して欲しい。

13、強大になりやすい企業の力をどういう方法でチェックするか、企業はその活動についてどこまで情報の公開をすべきかの観点を考慮する必要がある。

14、企業の決算書が示す数値について、企業の行動指針を適用できるか検討しては如何。例えば、配当率、地域社会への寄付、Xパーセント・クラブ、財政数値について。

15、地域社会とは別に市民社会と企業との関係について考察すべきである。

16、この行動指針の普及に労働組合が果たす役割を考慮すべきである。世界の貧困の解消に対する具体的提言を求める。

17、この行動指針を学校を卒業して社会に出ていく者の心得とすることが普及を助ける。大学の教材への採用を増やすことが望ましい。

18、「環境への配慮」の原則についての適用例に次を含んでほしい。商品の寿命を考慮し環境汚染物質を排出しない商品設計をする。持続する発展を確保するために森林を伐採すれば植林する。再生産不可能な鉱物資源を使用すれば回収して再利用する。

19、実行のモニタリングをする必要はないか？米国のマルコム・ボルトリッジ（元商務長官）表彰のような評価をすれば、実行を推進しよう。

C、この行動指針の内容について

1、原則七「違法行為の防止」を強化することを検討してほしい。

2、関係国際機関と連携した行動憲章にまで高めていただきたい。

3、米国の多国籍大企業の行動基準は、全世界的行動基準を明示すると同時に、各国にある子会社がその国の現実に対応するために、含される基準も特定基準として示している。この行動指針もこのようにすると現実的になろう。特定基準を全世界的行動基準に近づける努力も必要である。

＊「企業の行動指針」（日本語版）をご希望の方は、MRA事務局にご注文ください。（頒価一部五〇〇円、十部以上は一部三〇〇円）

●日経連と経済同友会の後援で開催された「コー円卓会議・企業の行動指針」ワークショップ［7月4日］

国際的企業に課せられた倫理的責任

富士銀行相談役
端田泰三

脱主権時代の到来

日本では、「第三の波」で有名になったアルビン・トフラーが、その著書「戦争と平和」の中で次のように述べている。

「アメリカは何年も前から、日本に対して貿易不均衡を是正するための様々な要求を続けてきた。関税の引き下げ、輸入制限の撤廃、流通システムの再編等々である。特に卸売りと小売りの流通問題は重要で、もしこの構造改革がなされた場合、除去されるのは貿易障壁だけではなく、日本国内の多くの政治的安定勢力を形成している小売店という社会階層が丸ごと姿を消すことになる、と私は考えた。これは単に貿易の問題にとどまらず生活様式の問題に土足で立ち入るものであり、民族意識の強い中南米などの国であれば、反米運動を巻き起こすような主権の侵害である。

日本政府も激しく反発すると思っていたが、そうはならなかった。日本は『日米構造協議』で、はるかに意味深い反対提案をした。日本はこの改革に取り組みましょう、その代わりにアメリカに次の三つをお願いしたい。労働者の質を高めるために教育制度の改善に取り組んで欲しい。経営者には長期的展望を持ってもらいたい。消費者には貯蓄を奨励してもらいたい。というのである。もし、こうした要求が日本やアメリカを主権の確立した国として羨ましがっている新生国民国家に対してなされたとしたら、どんなことになっていたか、それらの国は独善的な怒りを爆発させていただろう。

しかし、アメリカではそんなことは起こらなかった。それどころか日本の逆要求は、アメリカの弱点をつく合理的な批判として広く受け止められたのである。重要なのは、先進経済部門グループが今やそのような干渉を受け入れるのは当然だ、としたことだった。最も富裕な国の間では、国家主権は風穴だらけになっているのだ。元植民地国家が主権を求めている間にも、ハイテク世界は『脱主権時代』という未知の時代に足を踏み入れようとしているのである。」

些か長すぎる引用になったが、私は今回初めてコー円卓会議に参加させて頂き、その討論を聞いているうちに、時代の先覚者のこの卓見―脱主権時代の到来―を想い起こしたのである。彼は、今なお殺戮を犯しながらも主権を確立しようとしている国と、脱主権に向けて歩み始めた国との間に生じる行き違いが次の戦争を引き起こす一つの要因になる可能性があることを指摘しているのである。

今回で十回目になるというこの会議に、私は二十年来親しいおつき合いを願っているキヤノンの賀来会長のお誘いにより、日本側の一員に加えて頂き参加したのである。コーからの眺望も素晴らしかったし、良い経験をさせてもらったと思っている。

聞くところによると、この会議も最初は、日・米・欧間の貿易摩擦の激化を何とか解消できないか、そして相互の信頼関係を高めるにはどうすべきかをテーマに開催されたとのことである。賀来さんの言によると、初めの頃は日本側の主張はほとんど理解が得られず、文化や歴史、国民性や社会習慣などの差異は容易に埋められるものではないと痛感された由である。それに対し、今回は日本側の主張に賛意が表されたり、日本経済新聞の市岡さんの発表が終わると米・欧側の人たちから一斉に拍手が起こり、「変わったものですよ。数年前には考えられなかった現象です」と賀来さんは私の耳元で囁かれた。

十年という歳月の中で相互理解が

●日本人参加者にボスニア・クロアチア問題等についてお話する遠藤實ジュネーブ駐在日本大使(左端)

●右から1人ずつおいて端田富士銀行相談役、賀来キヤノン会長、市岡日本経済新聞取締役論説主幹

進んだということか、四年を越える不況に苦しむ現在の日本への理解ということか、明確ではないが、その双方であろう。あるいは脱主権時代へという歴史の流れも影響があるのだろうか。いずれにしろ数年前に比べると、格段に違う相互理解の中で進められた今回の会議に私は初めて参加させて頂いたのである。

先進国経営者の悩みの共通化・同質化

米・欧側の出席者の発言を聞いていて、まず感じたことは、自由と民主主義、資本主義と市場経済を基底とする国の経営者の悩みはほぼ共通しているということであった。そして次に感じたことは、この十年あるいは十五年の間に、悩みの共通化・同質化が急速に進んだのだという事であった。この間、先進国の間では国境の障壁が、やはり急速に薄れていったのである。ということは先進国間では国家主権の一部を相互に放棄する—脱主権化が進みつつあるということである。

貿易摩擦の問題のように、各国の利害がもろに衝突するような話になると、相手の主張を簡単に受け入れるわけにはいかなくなるが、議論のテーマが抽象的になると悩みの同質化が進んでいるだけに、お互いの主張は極めて理解されやすいように思えた。

例えば「企業は株主、従業員、取引先、地域社会に対して責任がある」との前提、そこで「高収益の確保か低価格商品の提供か」「利益水準の維持か雇用か」などの企業経営者としてどう考えるべきかというような課題についての相互の主張・意見は夫々多くの賛同が得られていたようだ。つまりこれらの課題が、参加者夫々のよって立つ経済システムそれ自体が抱えている悩ましい課題だからであろう。

そして、私はこう思った。この課題を追求してゆくと、結局「企業倫理」というテーマにぶつかるのだと。コー円卓会議も前回の会議で「企業の行動指針」を打ち出し、今回の会議で今後これをどのように世界に広め、展開してゆくかということが議論になった。

又、今回の会議では「小さい政府を求める」「官主導から民主導へ」という主張が述べられたが、脱主権への流れを感じさせる主張である。国境の障壁性がどんどん低くなる時代なのだ。また情報技術の高度化により生産コストの面から、国境を越えた、あるいは大陸的規模での市場がないと成り立ち難いシステムが出現し始めている時代である。

世界に共通する「企業の行動指針」の確立

こんな時代の流れの中で、国境を越え世界の共通の「企業倫理」「企業の行動指針」の確立を目指すこの会議の活動は、まさに時代の動きに適合した貴重なものであると言えよう。

しかし、いつの時代においても競争に敗れ脱落していく企業がある。まして日本では、四年を越える不況と厳しい構造改革の中で、生き残りのための苦しい戦いに心を痛めている経営者も多い。また、世界には発展途上の国も多い。「汚職は競争にゆがみをもたらす」との主張もあったが、発展途上の国では政府の統制も厳しく、それだけに小さい汚職が日常化しているところもある。そういう国では汚職は企業倫理にもとると主張しても、余り効果は上がらないだろう。経済が成長を続け、ある程度成熟する段階に達すれば必ず自浄作用が働くはずで、そこで初めてこの主張はそれなりの効果を生むことになるのではないか。

脱主権への大きな流れと、小さいながらも主権の確立を強く希求する幾重もの流れが交錯する世界、通貨や情報には国境がないといわれる時代、中進国、後進国を含めての大競争時代、ビジネス・リーダーたちの使命と責任は大きく、難しい。

時代の大きな流れと、企業に課せられた倫理的責任—先進国にあって国際的活動を続ける企業に課せられた倫理的責任を見失わないことが大切だ。コーでは教えられること多大であった。(終)

●円卓会議初参加の田林巌樹 安田総合研究所常務取締役とハリー・ハマリー3M社取締役夫妻

●国連社会開発サミットの議長を務めたソマビア駐国連チリ大使(左端)、ジスカールデスタン ヨーロッパ経営大学院副理事長(右から2人目)と談笑する賀来龍三郎キヤノン会長(中央)

CAUX
1946—1996

コー五十周年記念世界大会イベント（1996月６月29日～８月25日）

「過去を癒し、未来を築く」Healing the past, forging the future

—神の精神が人を啓発する時、人は平和と、和解と、変化の創造者となる—

６月29日～７月３日

「50周年祝典」　公式式典、感謝祭礼拝、ガーデンパーティー、
50周年記念講演（フィリップ・モテュー）

７月３日～６日

「未来を築く－21世紀に備えて」Forging the future－Preparing for the 21st century
全ての世代を代表する“未来を予言するオピニオンリーダー”が、人の精神性、人と社会との関係、我々を取り巻く世界に対するあり方について考える

７月前半

「岐路に立つヨーロッパ」Europe at the crossroads
21世紀におけるヨーロッパの精神的役割の醸成を目指すヨーロッパ連合（EU）内外、及びヨーロッパ以外の人々によるワークショップ

７月21日～24日

「コー円卓会議」The Caux Round table

７月24日～26日

「コー産業人会議」The Caux Conference for Business and Industry
ラテン・アメリカ、インド、中国、東南アジアの参加者を含むコー円卓会議との合同シンポジウムや国際コミュニケーション・フォーラム会議も開催

８月３日～７日

「信仰、道義的価値、我々の未来」Faith, moral values and our future
未来の自由を支えるために必要な価値を模索し、かつ、それを他の人々に伝えようとするあらゆる世代や職業の人々によるワークショップ

８月10日～15日

「和解への課題」An Agenda for Reconciliation
過去50年にわたってコーがもたらした和解を祝福する。国連関係者や紛争解決に関わった人々の参加による、戦略国際問題研究所（CSIS、ワシントン）、総合研究開発機構（NIRA）及びMRAの共催によるシンポジウムも開催される。都市の様々な民族、宗教、文化が出会う都市問題会議（都市の希望）も開催される。

８月19日～23日

「平和の創造者—女性によるイニシアチブ」The Creators of Peace－a Woman's initiative
“イニシアチブをとった人々から、それを21世紀につなぐ人々へのバトンタッチ”というテーマでのコーにおける２日半の会議とスイス各地の訪問

８月24日～25日

最終イベント　　オープンデー、ガーデンパーティー

第六回 アジア・太平洋青年会議レポート

アジア・太平洋青年会議（以下APYC）は、一九九〇年に台湾を開催地としてスタートして以来、今年で六回目を数えることとなった。今年のAPYCは、七月二十三日から三十一日の日程でフィリピンにて行われ、九ヶ国（日本・韓国・台湾・フィリピン・インドネシア・マレーシア・オーストラリア・インド・ラオス）から六十五名の若者が集い、総合テーマ「二十一世紀のために橋をかける」の下、様々な話し合いが行われた。日本からは国際開発センターの飯島亜由子さん、水泳指導員の柏原征則くん、東京外国語大学タガログ語科の川田悦代さん、オーストラリア・マッコーリー大学の菊地慶子さん、日本大学の長谷崎光治くん、MRA事務局の長野清志さん、そして私の計七名が参加した。

アジアの多様性とそれをつなぐ人間の素直さ

「この会議で二つのショックを受けた。カルチャーショックとMRAショックだ。」とオーストラリアから来た十八才の白人の青年が語ったこの会議は、二十三日の開会式で幕を開けた。

開会式では、参加者それぞれが民族衣装を着て自国の踊りや文化の紹介をしたり、会議が意義あるものとなることを願って四つの宗教（仏教、キリスト教、イスラム教、ヒンズー教）の祈りを捧げるなど、この地域が持つ文化的・宗教的・民族的多様性を浮き彫りにしていた。

マグサイサイ元フィリピン大統領の子息・マグサイサイ上院議員の基調講演に先立ち二名のAPYC参加経験者がスピーチを行った。その一人であった飯島さんの「五年前のAPYCで、台湾の女性に『日本人は嫌いだ』と言われ、大変ショックを受けた。それ以来、日本の歴史や世界との関わり合いに目が向くようになり、今の仕事についた。」という話に胸を打たれたマグサイサイ氏は用意していた原稿をしまい込み、自分も心から話すと次のように語った。「自分は父親からMRAのことを、問題ではなく回答をもたらしてくれるユニークで魅力的なグループとして聞いていたので、親近感を持っていた。」「私は若くして父を亡くしたため、いろいろな事について話す機会を得れず残念に思っている。皆さんには是非自分の家族に感謝の気持ちを持って欲しい。」また、マレーシアが経済的利害を超えてフィリピンを助けようとしている例を上げながら、この地域の友好関係を強め、融和と平和のために力を合わせて働く必要性を訴えた。

人間の持っている素直さと経験に基づいた話が人の心に触れ、人を動かすというこの一連のプロセスが会議の基調となった。

自分の内面を振り返る「静かな時間」

このAPYCの特徴は朝の体操と朝食の間に行われる「静かな時間」だ。朝一時間ほどの「静かな時間」では、十分から十五分間ひとりで静かになり、その時心に浮かんだ考えを十人くらいの小グループの中で話す。会議場の庭で朝のすがすがしい空気の中、自分の思ったことを素直に、勇気を持って発言した。最初は

●毎朝行われた「静かな時間」における話し合い

●開会式で話をする飯島さん。右端の男性がマグサイサイ上院議員

眠いとか、タバコを吸いたいとかということから始まったが、「自分が皆から受け入れられるかとても不安でしょうがない。」といった自分が抱えている悩みや、解決しなければならない問題等が話し合われるようになった。普段友だちとも余り話せないようなことも初めて会った人と話せたのは、毎朝自分の内面を見つめることで心の中にある様々なものが浮かび上がってきたことと、MRA事務局の方々の醸し出す優しさと人の話を真剣に聞く姿勢に参加者が勇気づけられたからだった。

盛り上がった「家族の価値」のセッション

アジアの多様性ゆえにか先述の「静かな時間」では話がなかなか建設的にならなかったグループでさえ、ひとつにまとまって一時間以上話し合った程、この問題は参加者の心をつかんだ。

「家族の価値」という題のこのセッションは、三人の子供を連れてオーストラリアから参加したラオス人難民夫妻の話で始まった。彼らが結婚前・後のつきあいの中から気付いた「家族の大切さ、価値」についての話には皆、たいへん感動し、その後予定されていたプログラムもひき続き家族をテーマに行われるよう変更された。

昼食後は、紙に描いた円の中心に自分を置き、そして家族ひとりひとりと自分との心理的距離がどれ程あるかを書き込み、その距離をいかにして縮めることが出来るか考えた。数人が前に出て発言したが、フィリピンのミンダナオ島出身の女性は「私の父を殺した日本人を許したい。」と泣きながら語った。彼女は日本の参加者の真摯な姿に胸を打たれ、自分の憎しみをなくす決意をしたのであった。するとAPYCの責任者のひとりであるフィリピン人の男性が「私も祖母を日本人に殺されたが、MRAを通して知り合った多くの日本人をみて日本人を憎む気持ちを乗り越えた。」と語った。その他、両親の別居など家庭の問題と、それらの問題を解決していく決心が多くのフィリピンの参加者から述べられた。その後は、小グループに分かれ「静かな時間」を持ってから家族についての話し合いを行った。今までの発言者の話を聞いて、台湾の女性が「私の家族はいつもテレビに向かって皆ばらばらに食事をとっていた。これからは家族と、特に父と話をしながら食事をしようと思う。」と語った。

その他のプログラム

APYCでは多種多様なプログラムが用意され、参加者同士が打ち解け仲良くなれるよう、そして頭でっかちな話し合いでなく、自分の経験に基づいた話が出来るように考えられていた。

会議の合間には歌、踊り、劇、折り紙のワークショップが行われた他、屋外でバレーボールなど行った。また四日目には、会議場隣接のキャンプ場でグループごとにバーベキューをした。

異なった背景を持つ人間同士も、何かを一緒に行ったり創作することにより、言葉や文化の壁を越えて仲良くなれる。これらのプログラムはそんな当たり前のことを再認識させてくれた。

毎夕食後には、自国紹介を各国の参加者が知恵を絞って行った。特にダンスを織り交ぜて日常生活を表現したフィリピンや、アボリジニーの文化も紹介したオーストラリア、またビデオを用いながらいかに自分が難民になったか説明したラオス人のプレゼンテーションが印象的だった。

全参加者が民族衣装に着替え、会場が一段と華やかさをました閉会式では、各国の参加者がそれぞれ自国の歌や踊りを披露する「文化の夕べ」が行われた。特に印象的だったのはフィリピンの国家斉唱で、これは歌う前に寸劇が入り、スペイン・アメリカ・日本に苦しめられているフィリピンが三者の圧迫をはねのけて立ち上がる（つまり独立を意味す

●オーストラリアから参加したアボリジニーの家族

●「赤トンボ」を歌う日本人参加者

る）と国家が歌われる。その他、マレーシアは国内の各民族が一緒になって歌をうたった。

各国の代表がＡＰＹＣで感じたこと・決心したことを発表したあと、最後に参加者一人一人に修了証書が手渡され会議は幕を閉じた。その後、閉会式の興奮が冷めやらない参加者のためにディスコタイムも用意されていた。

「フィリピン観光」

翌日はタガイタイからマニラを経由してバギオまで、バスで一日かけて移動した。マニラではナヨン・フィリピノで朝食をとり、博物館やミンダナオ島の伝統舞踊を見学した。バギオ到着後は市長を表敬訪問し、そしてセントルイス大学学生との交流会やショッピングを楽しんだ。バギオに二泊後、再びバスでマニラに向かう道中、米軍の撤退したクラーク空軍基地に立ち寄った。マニラではＭＲＡ関係者との交流会や、米比無名戦死の墓、市中心部の官庁・ビジネス街の見学、ショッピング等に出かけた。

地方都市ではフィリピン人の日常を、マニラの中心地ではフィリピンの持つ可能性を見ることが出来た。メトロマニラの『輝き・美しさ、デパートの国内外製品の豊富な品揃え』と、地方都市のマーケットの『くすんだ街並み、一歩路地を入れば写真も撮れないような緊迫感』とが対照的だった。

「ＡＰＹＣを振り返って」

この会議を振り返って二点考えたことがあるので、述べてみたい。

私はこの会議で、もっと参加者の夢や人生の目標などを話し合うことが出来たら更に良かったのではないかと思う。青年は家族との関係を考える以上にこの問題について考えるべきだし、またそれを出来る年頃にあると思う。

また今後はアジア・太平洋地域における多文化・多民族の共生の問題にもっと積極的に取り組んではどうだろうか。この地域には、異なった背景を持つ多数の集団が共存している国が多いが、ある国は治安が比較的良く経済的にも安定的な発展を続けているのに、ある国はそうではない。こうした経験をお互いに交換し、建設的な未来を築く種をまくことが出来れば、この地域の、そして世界の将来にＡＰＹＣが何らかの良い影響を与えられると思う。

「知り合うのは簡単だが、理解し合うのは難しい」という言葉があるが、このＡＰＹＣは様々な国や地域から参加した者同士が理解し合うきっかけをつくったと思う。（終）

成城学四年生　太田　敦之

MRAワールドニュースマガジン

IT'S ABOUT TIME...
FOR A CHANGE

フォー・ア・チェンジ
定期購読受付中

世界中で起こっている変革（チェンジ）とそれを担う人たちの動きを原文で！

MRAワールドマガジン「フォー・ア・チェンジ」誌、（英文年間６回発行）定期購読ご希望の方は住所、氏名、電話番号を明記の上、購読料（１年分＝¥4,500　※郵送料込み）を郵便振替（口座番号：東京8-38289）、又は現金書留にて下記の住所にお送り下されば、申込みを代行いたします。

〒113　東京都文京区千駄木5-49-2
ベガハウス　ミタケビル102
社団法人　国際MRA日本協会
「フォー・ア・チェンジ」係

アジアに架ける信頼の橋

(財)国際開発センター職員
飯島亜由子

私は、五年前に台湾で行われた第一回目のＡＰＹＣに参加し、自分の将来が変わるような経験をしました。それは『静かな時間』でのことでしたが、ある台湾の女性に「日本の男性は嫌いだ」と言われたのです。それは第二次大戦中、日本兵が罪のない子供や女性まで殺したばかりでなく、今でも日本のビジネスマンが経済的に台湾を侵略しているからだというのです。私は戦争は既に終わってしまったことだと思っていましたが、未だ戦争の傷跡が残っているという事に気がつき、大変ショックを受けました。また同時に、自分は学校で第二次世界大戦についての歴史は勉強しても、アジアの人々の気持ちまで考えたことはなかったことを反省しました。そして、これからはアジアの国々との真の友好関係を結べるよう、何か役に立ちたいと考えました。

現在、私はＯＤＡ（政府開発援助）関係の事業を行う国際開発センターというところで途上国から来る研修生のお世話をしています。また、ＭＲＡで「ユースフル」という若者のグループを作り、月に一度は会合を持つなど活動しています。しかし、このような活動の中で、私はアジアの人々のために何が出来るのであろうかという漠然とした思いがありました。また、忙しい毎日の生活を離れ、一度ゆっくりと自分自身の将来についても考えてみたいと思い、今回のＡＰＹＣに参加しました。

アジアにおける過去の過ちについて謝罪

今年は戦後五十年目という事で、私たちとしても戦争についての見直しをしてみたいと思いました。二日目の夜の「各国紹介」の時間では、若者から見た日本という国を紹介した後、第二次世界大戦での日本の過ちをアジア各国からの参加者に心から謝り、これからは私たち若者が新しい友好関係をつくっていきたいと伝えました。

私たちの発表に対して二つの反応がありました。肉親を実際に日本人に殺された経験を持ち、日本人を心から許せないという年輩の方々が、私たちの言葉を聞いて喜ばれ、そして私たちを励まして下さいました。また、同世代の若者たちは「学校の歴史の授業で日本兵の残虐行為を聞き、日本人に対して良い印象を持っていなかったが、まさか若い人たちから謝罪の言葉を聞くとは思わなかったし、自分たちはそれ程過去のことにはこだわっていないよ。」と慰めてくれました。

会議を通して同じグループで、かつ同室でもあった韓国の雪雅（スラ）さんと一番仲良くなりましたが、ある日、彼女から日本が韓国を何年間統治していたか知っているか聞かれました。私は戸惑いました。五年前にＡＰＹＣに参加したときに、アジアの人たちと接するには第二次世界大戦などの歴史を理解することが、どんなに大事であるかという事を痛感していたのに、結局自分はきちんと答えられなかったのです。彼女はそれについて何も言いませんでしたが、私は自分自身を本当に恥ずかしく思いました。

アジアへの真の架け橋を築くために

最終日の朝の「静かな時間」では、ＡＰＹＣで考えたこと、得たことなどを話し合いました。私は、歴史を知ることが大事であると考えていたにも関わらず、本当には理解できていなかったことを話しました。また、どんなに私たちが日本とアジアの国々との間に友好の橋を架けようと思っても、過去の出来事に邪魔をされてしまうような気がして、とても悲しくなり、思わず泣いてしまいました。そうしたら、フィリピンの女性で、お父さんが日本兵に殺されたという人が「いつまでもアジアの人々に負い目を感じることはない。自分も今まで日本人を許せなかったが、あなたの言葉を聞いて許す事が出来るようになった。」と言って下さいました。また次に、私たち日本人参加者のことをとても優しくお世話してくれていた、フィリピンの事務局の男性が「実は自分の祖母も日本人に殺されたのだ。」と話し始めたのを聞いて大変驚きました。

私は、アジアの国の人たちが未だに心の中では日本人を憎んでいるのではないかと思い、なかなか心を開くことが出来なかったのですが、自分たちの気持ちを正直に話し合うことで、何かひとつの絆が出来た気がしました。

アジアにおいて友好の輪を広げるには、お互いが本当に信頼し合うことが必要です。若い人たちは「過去のことにはこだわらないよ」と言ってくれますが、彼らは実際、学校の授業等を通して日本人が何をしてきたかを知っています。私もまた原点に戻り、アジアの人々と真の友好関係を結べるように努力していきたいと思います。（終）

●親しくなった韓国のスラさん(中央)、フィリピンの女性（右）と記念撮影

波瀾万丈の旅を終えて

日本大学1年生
長谷崎光治

静かな時間が一番の収穫

私は今回のＡＰＹＣで予想を上回るたくさんの経験ができたことを、とても嬉しく思います。その中でも一番の収穫は、早朝の澄んだ空気の中で毎日行われた「静かな時間」です。

まず小グループで話し合えること、そして何よりも一人一人が思ったことを素直に発表できることが良いと思いました。私は親友以外の人に心の内を明かすことは、気をつけなければならないという考えを持っていました。しかし、グループ全員と共に新しいことを学び、そして彼らとの間に壁をなくしたいと思うようになりました。

会議二日目の「静かな時間」で、「みんなと心の壁を壊してコミュニケーションをしたいが、他の人から受け入れられないのではないかと恐れてしまう。」と涙を流しながら語ったフィリピンの女の子がとても印象に残っています。まさに心の声でした。彼女も私と同じ気持ちを持って悩んでいるのだと知って、一気に親しみを覚えました。

「静かな時間」は私が一番好きなプログラムでした。しかし、気持ちが積極的になるのと裏腹に、英語がうまく使えず、神経質になっていくことが一方ではありました。ここでは日記形式で振り返ってみたいと思います。

22日、水が出なくてタンクの水で体を洗った（バケツ三杯分の水で）。

23日、マニラ見学の後、会議場へ（タガイタイ市）。

24日、折り紙のワークショップと自国紹介が重なり非常に忙しかった。楽しみだった自国紹介は英語で発表できず楽しめなかった。

25日、折り紙の二日目。手取り足取りで必死に教えた。

26日、バーベキュー。火力が弱くなかなか焼けない。ココナッツジュースを初めて飲んだ。夕食の時フィリピンのゲームを教わり、太田敦之君と爆笑した。

27日、「文化の夕べ」とディスコ。フィリピンの女の子に踊りを教わる。

28日、半べそ状態。フィリピンの仲間との別れ。バギオにバスで十時間強の移動。

29日、セント・ルイーズ大学での催し物。ダンスと歌は南国にいるようだった。30日、バギオのマーケットで買い物。三十年前にタイムスリップしたような気分。

31日、帰国準備。

1日、帰国。

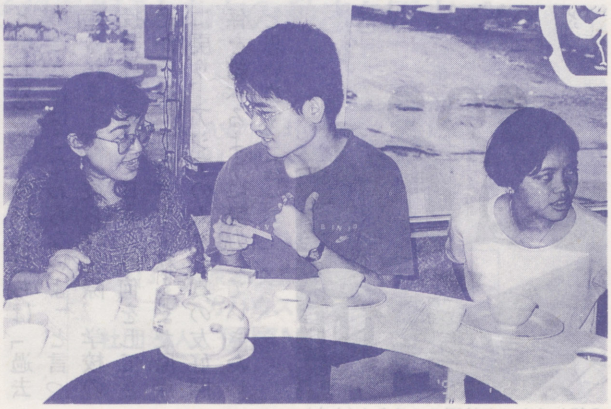
自己嫌悪から転じた嫉妬心の克服

この日記の裏には、英語がネックで自己嫌悪に陥ってしまった記録が隠されています。二十四日から二十七日にかけて多くの行事がとても忙しく凝縮されていて、それをこなしていくうちに、知らず知らず英語に対するストレスが蓄積されました。会議前半は積極的な気持ちと好奇心でカバーしていましたが、二十四日の自国紹介で自己嫌悪に陥ってから、英語を巧みに操る日本の他のメンバーに対する嫉妬心が頭をもたげてきました。最大の気持ちの揺れ動きは、二十八日のバスの移動の最中でした。日本で練習していったメインのイベントが終わり、ほっとしていた時にホームシックにおそわれました。

そんな時、心を打ち明けてみると助けてくれたのは、日本のメンバーの方々でした。「最後まで頑張ろう。」とか「光治君がそんな思いをしていたことに気がつかなくて」と謝ることまでもされて、なんだかとても励まされました。

最終日に聞いて驚いたのは、台湾人の英語教師の人でさえ、「話したいことが上手く表現できず、その事のつらさを胸に帰国する。」と言ったことでした。表面上は楽しそうにしている人でも、内面では葛藤があるのだと知りました。

会議への参加で思いもよらぬ経験をしてしまいました。これは、自分自身初めての体験です。このような気持ちを悟れたのは、「静かな時間」を持ち、毎日自分の心の声を聞こうとしたからではないでしょうか。そして、会議はＭＲＡの専従の皆さんのかげながらの大きな力のおかげで無事終了し、まさに大成功といえると思います。そして日本の六人のメンバーや今回のＡＰＹＣで友達になった多くの国の人たちに対する感謝を忘れず、今回学んだことを自分の周りで生かすことを課題として、自分の生き方を模索していきたいと思います。（終）



●台湾の女性と話をする長谷崎君

MRA講演会シリーズ

—戦後50年—

『日本の進路を決めた10年』関係者による証言

本年の第2回MRA講演会では、1950年代に日本の復興、国際社会への復帰、進路の決定に関わった人々の記録をまとめた「日本の進路を決めた10年」の関係者に貴重な写真も交えて、当時の経験を証言していただきました。その中から渋沢雅英さんの発言を紹介させていただきます。

新しいパラダイムを目指すMRA

渋沢 雅英
東京女学館理事長
アジアセンターODAWARA代表

「日本の進路を決めた十年」という意味では、その仕事に私が参加したのはその十年の最後の、本当に最後の時でした。一九五九年春に、アリゾナから「光の矢」という名前の劇を持って日本に帰ってきました。東京は日米安保条約改定問題で大いにもめていまして、決定的対立に至ろうという雰囲気でした。また、三池炭坑では五十年代の労働争議の大詰めというべき、総労働対総資本の大対決が展開されていました。MRAはそういった日本での現象を世界的思想戦の最前線である、と位置づけて、持っているネットワークを総動員して対応しようとしていました。それは私の知る限りでは、MRAの活動が一番盛り上がった時期ではなかったかと思っています。世界各地で同時多発的にいろいろな活動が展開されました。それぞれが相互に関連して効果を高めていました。日本人が作った「タイガー」という劇が南米を七ヶ月にわたって席巻しました。千八百万人の観客を動員するという驚くべき反響を起こしました。それに触発されてペルーの日系三世の学生が「コンドル」という劇を作り、これも南米各地で活躍しました。一方「タイガー」の台湾版のように「ドラゴン」という劇がコーで作られ、コーを起点として全欧州で活躍していました。六十年二月には、アメリカ・マキノ島のMRAセンターで作られた「最高の経験」という立派な映画がハリウッドで初演されました。六十年三月には、今度は西ドイツの炭坑夫が作った「ホフヌング（希望）」という劇が日本に来て、三池争議の中心地だった大牟田に乗り込んで上演しました。六十一年になると「タイガー」は、アメリカ大陸から欧州に渡り、インドを経てベトナムのフエ、ダラット、そしてサイゴンなどで公演されました。

MRA活況の二つの背景

あの頃のMRAがどうしてあんなに活況を呈したかというと、私は今考えて二つの背景があったのではないかと思っています。

一つは世界共産主義の大攻勢です。そして、それに対する西側陣営の、ともすれば、「生温い対応」にたいする非常な危機感が生まれていました。キューバに革命が起こり、その後ソ連がスプートニクを打ち上げる、フルシチョフが国連で机を叩いて「西側を葬り去ってやる」と豪語したのはその頃のことです。MRAは、これは人類の将来への重大な挑戦であると考え、世界的レベルでの対応を始めました。今から考えると、当時共産主義は重大な内部矛盾を抱え込んでいました。大躍進の失敗は中国共産党を分裂させ、その結果、毛沢東の反発が文化大革命につながっていきました。また、一枚岩のように見えた中国とソ連の分裂が進行していて、それは共産主義時代の崩壊につながっていく運命を持っていました。しかし、その時点で外部では、共産主義は一枚岩であるし、世界制覇のための最後の戦いを始めたという印象を受けていました。事実、MRAが各地で活動すると、それに対するものすごい反発を受けました。そのことがMRAの意識を益々高揚させ、危機感を増幅させていくといった側面があったと思います。

●アジアセンターの竣工式で開会の挨拶をする当時の池田首相（左）と渋沢氏（右）〔1962年〕

もうひとつの背景は、創始者ブックマン博士の健康と精神状態でした。私は帰国の前、アリゾナでかなりの期間ブックマンのそばで暮らしていました。体力の衰えはもう明らかでした。歩くことも出来ず、終日部屋を暗くして、大きなベッドの上で静かに考える日々が続いていました。しかし、精神的には益々冴えて、あの大きな瞳にはこの世のものとは思えないような、情熱と確信が輝いていました。全世界の活動がこのたった一人の老人の神秘的な力によって推進されているという感じが非常に強くしていました。寝ていてもその全身から放射される危機感が周囲をびりびりさせていました。「もはや歩いていては遅いんだ。走れ」といったようなことをよく言っていました。それは、ブックマン自身の残りの時間が少なくなりつつあることを如実に感じさせることでした。そのことがブックマンの周辺に、何か侵しがたい精神的な緊張を作っていました。

日本の急速な変革とフランク・ブックマン

側近との対話の中ではしばしば、世界の闘争の当面の焦点として日本が話題になりました。アリゾナの澄みきった空気の中から見ると、日本の指導者の中に蔓延している道義的妥協、野心、あるいは保身といったものが国益に反し、かつ世界を危機に陥れている、日本は何か罪という名の深い霧に包まれているような感じがしました。

「日本人は一体どうする気なんだ」というブックマンの鋭い問いかけに応えて「光の矢」という劇が生まれました。それは政財界の指導者たちの私生活を事実に即して描いた、名誉毀損すれすれの物語でした。そして、国の中枢に巣食っている妥協とか不道徳、それが生み出す危険を真っ向から描いたものでした。何かに憑かれたような感じで、たった二日間で書き終えました。自分で書いたという感じは今もしておりません。与えられた、という感じでしかありません。最初の本読みを聞いてブックマン博士が「これは神の劇だ」と評価し、「光の矢」という名を自ら付けてくれたわけです。私たちの未熟さ、あるいはいろいろな失敗にもかかわらず、この矢は確かに日本の中枢部の何かを射抜いたと私は感じました。国会周辺の劇場で連日上演しました。六十年には民放の全国ネットで何回も放映されました。反響は非常に大きく、安保闘争に疲れ、或いは心配している沢山の人々に新しい見方を与えたのではないかという感じがしました。

こういったことをテコにして、岸首相にも接触しましたし、総評の太田議長や岩井さんの所にも何度も行きました。また、五十九年の十二月には河野一郎氏が米国マキノ島の会議に参加しました。しかし、六十年春には保革対立は危険な様相を呈し、政治システム自体が危険にさらされていました。そして六月十七日の加藤シヅエ先生の有名な公開書簡が三大新聞に掲載されました。その反響は本当に信じられないほどで、目の前で国の世論が変わっていく、その劇的な瞬間を見たような気がしました。日本は本当に急速に変わっていきました。対決に揺れた五十年代から、安定と成長の六十年代に移行していったわけです。そうした全てが、アリゾナで静養しているブックマンという一人の人物の戦略と信念から生まれてきたというのは驚くべき事だったと思います。彼の精神からほとばしるアイデアが周りの人間を活性化させていく、それが国を変え、世界を変えていきました。一発の弾も打ちませんでしたし、一銭の金も使わないで地球の裏側の政治状況を変えていく。こういった力を持ち、そのためのネットワークを構築していったブックマンという人は、やはり今世紀の巨人の一人だったと思わざるを得ないわけです。

小田原アジアセンターの竣工

しかし、そのような無限に見えたブックマンの精神力もついに限界に

●小田原アジアセンターの開所式。池田勇人首相の他、片山哲、吉田茂、岸信介の前・元首相が出席した。日韓国交正常化につながる大平正芳外相との会談を行った金鐘泌氏の来日への道も開いた

●首相官邸でフランク・ブックマン博士を迎える鳩山首相夫妻。左は星島二郎衆議院議長。博士は日本滞在中、重光葵外相より勲二等旭日章を授与された〔1956年〕

達して、六十一年の夏、ドイツでこの世を去りました。しかし、生前に極限まで高められていた活動のエネルギーは死後もしばらくは衰えませんでした。六十二年十月、池田総理大臣他、沢山の国の代表を迎えて、小田原アジアセンターの竣工式が行われました。国交の無かった韓国からも金鐘泌氏が来られ、これが日韓国交正常化のきっかけの一つになりました。

六十三年の夏には、木村吉紀さんが作った「共産主義を超えて革命へ」という音楽劇が誕生しました。全国各地、自衛隊の基地で公演したり、インドに招かれて、デリー、カルカッタ、マドラスの各地で上演していました。六十三年十月には、ラジモハン・ガンジーがおじいさんのガンジーの塩の行進に倣って、ケララからデリーまで三千マイルの行進を始めました。こうしたアジアのプロダクションとならんで、ピーター・ハワード氏の劇が活動の重要な柱となっていました。「真夜中の音楽」、「ハリケーン」、或いは「ラダー」、「ブラウン氏、丘を下る」等々、非常に内容の深い傑作が次々と誕生しました。六十四年、タイム誌がそのピーター・ハワードを特集して、MRAにおけるハワードのリーダーシップを特に記述し、創始者の死後のMRAの継続的発展にむしろ驚きを持って注目しました。その証拠の一つとして小田原アジアセンターの竣工式があげられました。

困難な時代も体験したMRA

しかし、ブックマンが残したエネルギーが無限に続くわけにはいきませんでした。六十五年、南米訪問の途中でハワードが亡くなりました。その早すぎる死とともにMRAはその性格を大きく変えていくことになりました。その理由はしかし、指導者がいなくなったというだけではありませんでした。六十年代の世界が五十年代の世界と構造的に全然違うものになろうとしていました。戦後世界を支配した冷たい戦争のエネルギーは、人々が気が付かない内に消耗を続けていました。中ソの分裂は両国に深刻な困難をもたらしました。共産主義自体の崩壊が加速し始めました。内部の分裂がイデオロギーの活動にとって、いかに致命的なものであるかと、う証明であり、それは皮肉にもMRAの活動自体にも大きく影響し、いろいろな形で分裂を起こさせました。六十年代の世界を彩ったベトナム戦争は、始めは五十年代の思想戦の延長であるように思われていました。しかし実際には全く違った要素、民族主義とか宗教とかが沢山入っていて、対抗軸が益々不明確になっていきました。それらへの対応を巡って、アメリカの世論が分裂を始め、自由世界全体が

再版のご案内

日本の進路を決めた

●国境を越えた平和のかけ橋●

10年

元・MRA日本駐在代表
バーゼル・エントウィッセル 著
藤田幸久 訳

ジャパンタイムズ刊　定価1800円

本書は、生活に追われ、希望を失っていた日本人の中に、真の民主主義に目覚め、国際社会に復帰しようという意欲をかきたてようとした10年間の著者の体験をつづったものである。有力な政治家、実業家を回想しながら著者は、当時の日本人の平和に対する真しな努力を伝えている。著者の眼は経済大国として新たな国際的孤立に直面している現在の日本に対する警告の意味を含んでいる。特に韓国やフィリピンへの謝罪を素直に表明した当時のMRAの日本の関係者の態度は、最近の日韓関係の推移の出発点として注目される。(1990年6月3日朝日新聞書評より抜粋)

○お申し込みはMRA事務局までお願いします。

共通の問題を見失っていきました。アメリカのMRAが「アップ・ウィズ・ピープル」を展開し、運動の知的根拠を構築しようと「マキノ大学」を発足させました。しかし、反戦ムードを背景とする学内の論争のあまりの激しさにMRAの指導部は自信を失い、結果として多くのアメリカ人が心血を注いで、大変な犠牲を払って作った「マキノ」は消滅していきました。世界情勢に対するアメリカとヨーロッパの認識が大きく変わって、MRAの戦略的目標も多様化していきました。もともと分権思想が強くて、中央集権のシステムが不在であったMRAは、そうなると困難が倍加しました。各国内部でも資産の管理、行動の目標、生き方、進行、等々を巡って闘争が始まりました。

日本の場合はこうした論争をなるべくさけて、「アップ・ウィズ・ピープル」の方式を活用して、アジアとの交流に努力しました。しかしアジアは複雑で、MRAの西洋仕込みの方法ではなかなか割り切れない、理解できないことが多くありました。相馬豊胤さんがタイの勉強を始め、私がインドネシアの勉強を始めたのも、そうしたことに対するニーズというか、自信喪失からきたものです。国内でも「アップ・ウィズ・ピープル」の方式の活動が続きました。北海道の青年層への働きかけは非常に効果的なものがありました。武道館で一万人を集めて「シングアウト」の公演をしました。大衆運動としての可能性を垣間見た気がしました。しかし、中心を失ったMRAではこうした実績を世界のイシューに関連させるのは困難でした。共産主義の場合と全く同様、分裂したイデオロギー運動を続けるのは非常に難しいというのが分かった次第です。

一方、アジアセンターは建設費の支払いと増大する運営費の負担に苦しみました。建設費の未払いをようやく払い終わったのは九十年、建築後二十八年経っていました。その時の開放感は格別でしたし、自分でも良くやったと今でも思っています。しかし、それは昔とは性質の違う闘いです。MRAはやはり困難な時代に入ったと言わざるを得なかったわけです。

過去を克服した新しい活動の枠組み

思いおこせば、長い間MRAはブックマンという巨大な神秘的な力を背景にして活動して参りました。経済的にもブックマンのカリスマは打ち出の小槌のような役割を果たしていました。それは巨大なハンディキャップを与えられたようなものでした。結果としてそのハンデの存在を前提とした行動様式が定着していました。これからのMRAはこうした過去を克服し、新しい活動の枠組みを作ることから始めないといけないということを私は痛感しています。創始者のカリスマとか、或いは危機感にただ依存するのではなくて、日常の行動が活動の再生産につながるような、そういう行動をしなければいけないだろうと思います。そして新しい行動様式を可能にするような条件が整い始めている感じもいたします。共産主義の消滅によって、世界の認識の形が大きく変わったことは間違いありません。その証拠のひとつが、最近ワシントンで出版された「ミッシング・ダイメンション・オブ・ステートクラフト」という非常に面白い本の出版です。MRAの活動が特異な現象としてではなく、人間の精神の営みとして扱われている。MRAが過去にこだわっている間に、世界はどんどん先に進んで、もう変わってしまったのかも知れないという感じさえ私はしました。従って、時代にふさわしい行動のパラダイムを作ることが出来れば、活動の分野や可能性はまだあると私は感じています。MRAは再び世界の歴史と対面することが出来るでしょうか。皆さんの努力を心より期待します。（終）

▽事務局通信△

●去る十月十五日・十七日の両日、小田原のアジアセンター及び東京の国連大学において、MRA国際ダイアローグが開催されました。海外からのゲストとして、ダグラス・ジョンストンCSIS（戦略国際問題研究所、ワシントンDC）副所長、レニー・パン カンボジア子供教育基金代表、アレック・スミス元ジンバブエ「良心の内閣」メンバーを迎え、「和解と共生への課題」というテーマの下で行われた今回の会議には、外交官、各国大使、学者、NGO関係者、学生など様々な分野で活躍される方々が多数参加されました。詳しくは、次号でレポート致します。

●茨城では、来春の「国際MRA茨城」発足に向け着々と準備が進められています。十月末にはアレック・スミスさん、レニー・パンさんが水戸を訪れ、発足準備会のメンバーと親睦を深めました。アレックさん、レニーさんの話には、皆さん大変心を打たれたようです。現在、世界中で起こっている様々な問題の解決に「地方」からいかに取り組んでいくのか国際MRA茨城には大きな期待が寄せられています。

●本年の皆様の様々なご支援にお礼を申し上げますと共に、一九九六年が素晴らしい年になりますことを事務局一同願っております。来年も宜しくお願いいたします。